

目指す学校像	SSH指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
--------	--

重点目標	1 SSH指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学 校 自 己 評 価						学 校 関 係 者 評 価			
年 度 目 標				年 度 評 価		実施日令和2年1月21日			
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策		
1	<現状> ○SSH中間評価において本校の取組が評価され、評価校上位10校に選出された。また、福島復興探究学を新たに企画、実施するなど、特にフィールドワークの充実が図られた。 ○SSCクラスを選択した生徒が大幅に増加した。(1クラス→3クラス) ○大学入試センター試験受験者のうち約4分の1の生徒が5教科受験するなど国立志向が高まり、現役、浪人を合わせ、2年連続で国立大学30名以上合格の実績を上げている。 ○2021年度から導入される大学入学共通テスト及び英語成績提供システムの業務を開始した。 <課題> ○全校一体となったSSH2期目の指定に繋がる取組の実施 ○SSCクラスの要である「数理探究」の充実 ○生徒が明確な高い「志」を抱き、主体性を持って挑戦し学ぶ姿勢の育成と、それを実現できる環境整備	SSH指定校としての取組の充実化	① 1学年については、全生徒を課題研究に意欲的に取り組ませる。 ② 2学年については、理数科及び普通科SSCで発展的な課題研究に取り組ませる。 ③ 3学年理数科については、2学年で研究に取り組んだ内容を論文にまとめ、英語で発表させる。 ④ SSHの各行事に積極的に参加させる。	① 生徒の研究テーマの設定、研究の実施状況、発表の状況 ② 生徒の研究テーマ、研究計画の立案実行、考察等の論理性 ③ 論文の作成状況と英語ポスターセッションの実施状況 ④ SSH各行事への参加数	① 各学期の面談及び進路希望調査の実施回数 ② 大学入試センター試験の得点600点以上取得生徒の割合 ③ 模試の自己採点、学習自己管理の状況、生徒の学習動画視聴時間 ④ 2学年全員の「共通ID」の登録	課題研究については、昨年度課題であったテーマ設定までに掛かる時間の短縮を図り、生徒に考えさせる指導を強化した。その結果、生徒の探究意欲が向上し、課題解決能力の向上に繋がった。 SSH関連行事は、各回とも募集人員を上回る応募があり、生徒に浸透している。また、さくらサイエンスプランでは、相手国参加生徒の、本校取組についての評価が非常に高く、本校生徒にとっても充実したものとなっている。	A	・SSH2期目の指定と、次期学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究授業の構築が大きな課題である。SSH推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸他なった対応が必要である。 ・生徒が高い「志」を抱き、第一志望の進路実現に向けて主体的に学び続けるために、計画的な進路指導を行うことは引き続きの課題である。 通常実施している進学補習への積極的な参加の呼びかけや、教育支援ソフトを活用した自学の習慣づけを通して、学力育成を充実させていく。	・SSHの取組が校内で定着し、参加を希望する生徒が増加していることは素晴らしいことである。今後、文系の生徒がより参加しやすくなるよう工夫をお願いしたい。 ・さくらサイエンスプランや福島復興探究学など、国内外を問わず他校の生徒と相互に交流していることは大変良いことである。今後も事業を継続し、生徒には同年代の仲間づくりをしてほしい。 ・グローバル化に対応できる学力を育成できるカリキュラムの編成が大きな課題である。文理独立型カリキュラムは日本独特のものであるため、学習指導要領改訂を機に検討が必要。
2	<現状> ○全HR教室をホワイトボード化し、電子黒板機能付きプロジェクトに対応する環境が整備されている。 ○授業アンケートを実施し、その結果を教員へフィードバックし組織的な授業改善に努めている。 ○1年生「数理探究」は2単位で課題研究のポスターセッションを全員が実施した。OST、GTECの実施が組織化され、運営面での充実が図られている。 ○ICTを活用した研究授業を市教研の一環として実施するなど、全校としての取組が実現できている。 <課題> ○ICT機器を活用した主体的対話的で深い学びの実践の蓄積と生徒の知的好奇心を満足させる教材の研究と開発 ○授業アンケート、保護者アンケートの引き続きの実施と、そのフィードバックを踏まえた継続的な授業改善 ○「数理探究」の一層の充実と、自ら課題解決に取り組む学習姿勢の更なる育成 ○英語4技能向上を目指した効果的なOST、GTECの実施	生徒の学力向上に向けた全校で取り組む授業力の向上	① 1、2学年の「数理探究」において、生徒が主体的に学習課題を見つけて論理的に分析し、計画的な課題解決力を身につけさせる。 ② ICT機器をフル活用し、授業支援ソフト等の教員の活用頻度を高めるとともにアクティブラーニングの実践を推進する。 ③ 授業アンケート、保護者アンケートを実施し、教員の授業改善に資する。 ④ 英語4技能向上に関する取組を学校全体で推進していく。	① 数理探究の課題研究における仮説の論理性と具体性のある研究計画、班内分担や共同作業の円滑性 ② 授業支援ソフトの活用の割合 ③ アンケート結果を踏まえた授業改善に係る自己評価 ④ OST、GTECの組織的・協力的な取組の状況	数理探究は本校の要の授業のひとつであり、教員3人のティームティーチングで実施している。それぞれの教員が持つ指導力を発揮して生徒に適切な助言を与え、充実した探究活動が展開されている。 ICT機器の活用については、メディア管理部が中心となって教員研修会を実施するとともに、市教研を兼ねた授業研究会を実施し、全校を上げて取り組んでいる。 また、英語4技能の向上に係るOSTについては、今年度実施の体制が整備され、より組織的な運営がなされている。また、1年生が使用するタブレットを機種変更したことで、当初、回線接続に係るトラブルが見られたが、現在は順調に実施できている。授業アンケートは2月に実施予定。	A	・授業改善を継続し、ICT機器を活用した主体的・対話的で深い学びの更なる充実が課題である。今年度実施した教員研修や授業研究会の引き続きの実施をとおして、学校全体の機運をより一層高めていくことが必要である。 ・OSTは引き続き実施していく。	・ICTを活用した授業は、生徒から理解しやすく、効率の良い学習できるといった声がある。教員のより一層の活用が推進されることを期待とともに、大宮北高校の取組や活用のノウハウを市内中学校に広く発信していただきたい。 ・OSTは今後も推進してほしい。今後更なる校内の連携体制の整備、取組の定着を望む。	
3	<現状> ○「自主」「自律」「創造」の校訓のもと多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。 ○自転車通学の登下校のマナーに関して、地域の方からの苦情が寄せられる。 ○教育相談体制の充実を図る。生徒、保護者と職員、2名のスクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーとの連携が組織的に機能している。 <課題> ○生徒が学校生活の中で主体的に判断し行動できる活動の促進 ○生徒事故件数のゼロ件維持と通学のマナーに対する苦情件数減少 ○職員の防犯、安全意識の更なる向上 ○教育相談に係る指導の外部機関との一層の連携	安心、安全な高校生活	① 風紀委員を活用し、生徒自らが安心安全な高校生活を送ることのできる環境づくりを推進する。 ② 交通安全教室を効果的に実施し、生徒のマナーと安全意識を向上させる。 ③ 問題発生時の適格かつ迅速な対応に係る教職員の意識を向上させる。	① 風紀委員、職員による活動の年間の実施状況 ② 事故件数の推移と苦情件数 ③ 事故防止、防犯に係る情報提供	① 風紀委員、職員による活動の年間の実施状況 ② 事故防止、防犯に係る情報提供	風紀委員による登校指導や、自転車点検は毎学期定期的に実施し、生徒の安全意識高揚に努めている。しかしながら、自転車の乗車マナーに関して、一部の生徒に対して地域の方からご指摘を受けているが、登下校時を含め、生徒事故ゼロで推移している。	B	・全生徒に対し安全のための交通ルール遵守の態度育成が課題である。引き続き交通安全教室や風紀委員など生徒自らが活動する取組を実施していく。	・生徒が安心安全な高校生活を送れるよう、地域団体としてもサポートしていく。学校では、交通ルール順守の必要性について生徒自らが考える機会を設けることが必要である。
4	<現状> ○小学生向け「自由研究サポートプログラム」、中学生向け「先進的科学的探究プログラム：ASEP、Jr.Hi」は、いずれも好評を得ている。 ○大学との連携を拡大した。新規に東京農工大、芝浦工大との連携を開始する。 ○SS科学英語実践講座に普通科から多数の生徒が参加し、参加生徒の英語運用能力を高めることができた。 ○SSHオーストラリアサイエンス研修、台湾サイエンス研修に加え、修学旅行における国立シンガポール大学とのサイエンス研修を計画している。 <課題> ○アウトリーチプログラム等の効果的な発信と地域への周知 ○海外サイエンス研修における事前事後学習及び現地での共同研究の充実化 ○生徒募集を意識した魅力あるプログラム開発と情報発信	さいたま市内の理数教育の拠点校としての役割	① 「自由研究サポートプログラム」の内容及び宣伝をより充実させていく。 ② ASEP Jr.Hi について内容を改善し、中学生の科学に対する興味関心を引き出していく。 ③ 地域のニーズを踏まえたアウトリーチプログラムを展開していく。	①②③ 種々アウトリーチプログラムの内容及び参加者の満足度 ④ 参加者の満足度	①②③ 種々アウトリーチプログラムの内容及び参加者の満足度 ④ 参加者の満足度	地域に根付いたアウトリーチ活動が実施できている。特に自由研究サポートプログラムは参加が600名を超え、昨年度比2割以上の増加となった。また、今年度新たに青少年宇宙科学館と連携した高校生ロケット教室を行い、好評を得た。	A	・アウトリーチプログラムの取組は、ほぼ完成形を迎えていると評価できる。前例踏襲するのではなく、ニーズに即した内容を取り入れていくことが課題である。	・アウトリーチ活動は、参加する小・中学生に多くの刺激を与える貴重な機会となっている。今後も関係各機関と連携を図りながらの実施を期待する。 ・修学旅行において、現地大学との新たな交流が実現し、多くの生徒がグローバルな視野の必要性を感じ取れたことはとても大きな成果である。今後も積極的な交流が継続されることを望む。 ・留学生3人の受け入れはとても素晴らしいことであり、生徒にとって、とても良い刺激になっている。今後も積極的な受け入れをお願いしたい。
4	<現状> ○大学との連携を拡大した。新規に東京農工大、芝浦工大との連携を開始する。 ○SS科学英語実践講座に普通科から多数の生徒が参加し、参加生徒の英語運用能力を高めることができた。 ○SSHオーストラリアサイエンス研修、台湾サイエンス研修に加え、修学旅行における国立シンガポール大学とのサイエンス研修を計画している。 <課題> ○アウトリーチプログラム等の効果的な発信と地域への周知 ○海外サイエンス研修における事前事後学習及び現地での共同研究の充実化 ○生徒募集を意識した魅力あるプログラム開発と情報発信	グローバル人材の育成	① グローバルサイエンスプログラムに対応できるように、SS科学英語実践講座の充実に取り組んでいく。 ② サイエンス研修の事前学習を充実させ、現地の活動を深化させるとともに、現地の環境に接触させる時間を増やし、異文化理解を深めさせる。 ③ シンガポールへの修学旅行において、サイエンス研修を実施する。 ④ 大学との連携を充実させることで、主体的な研究意欲を育成する。	① SS科学英語実践講座の実施内容、参加生徒数及び参加生徒の満足度 ② 現地の高校生との事前のやり取り及び共同研究の実施内容 ③ シンガポールへの修学旅行におけるサイエンス研修の実施内容 ④ 大学との連携プログラムへの参加状況	① SS科学英語実践講座の実施内容、参加生徒数及び参加生徒の満足度 ② 現地の高校生との事前のやり取り及び共同研究の実施内容 ③ シンガポールへの修学旅行におけるサイエンス研修の実施内容 ④ 大学との連携プログラムへの参加状況	SS科学英語実践講座への参加生徒は昨年度より増加(約13%増)した。参加生徒からは、グローバルな視点を持つきっかけとなった、英語での表現力が向上したという声が多く寄せられ、満足度が向上している。 また、今年度は新たに芝浦工大、東京農工大、東洋大と連携が実現した。芝浦工大に49名、東京農工大に15名、東洋大に17名を派遣した。 修学旅行のサイエンス研修では、シンガポール大学との交流が実現し、生徒が世界的な視野を持つことの必要性を体感する貴重な機会となった。	A	・サイエンス研修をはじめとする海外交流プログラムは、年々充実が図られ、本校の特色ある教育活動の柱として定着している。取組内容を一歩一歩確実に前進させていくことが課題である。相互交流を深め、信頼関係の構築を一層進めていくことが必要である。	・留学生3人の受け入れはとても素晴らしいことであり、生徒にとって、とても良い刺激になっている。今後も積極的な受け入れをお願いしたい。